

フェン



リムリア



ジュレ・ミイ



クリシュナ



ガルン・ストラ



イル・カタム



ゾマ



カルラ



ダム・ダーラ



操兵 名鑑

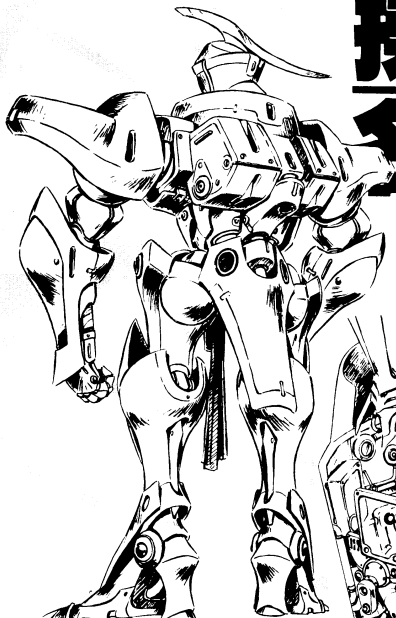


ニキ・ヴァンシュマール

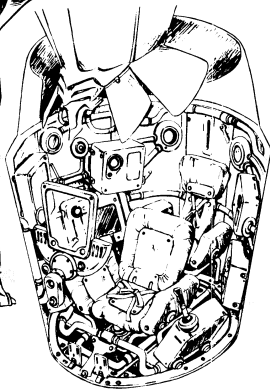
〈白き操兵〉と呼ばれる伝説の秘操兵。
〈黒き操兵〉ハイダルとの闘いで大破
するが〈白亜の塔〉の自動機械により
完全に修復された。



操兵名鑑



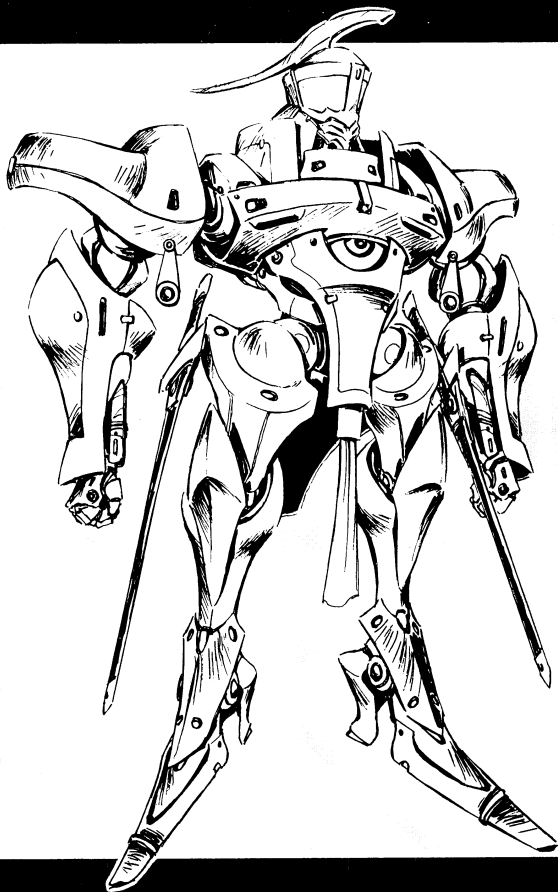
アビ・ルーバの操手槽は、他の操兵とは異なり完全密閉型で空調設備まで備えている。



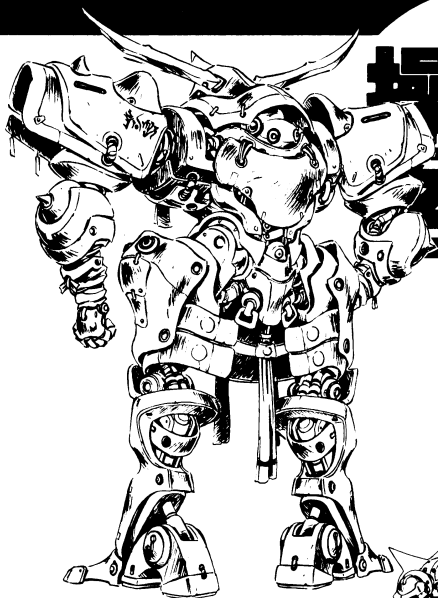
アビ・ルーバ

全身を「鏡面装甲」で覆った工呪会製の最新鋭機。東方聖刻教会製の操兵、特に練法師の操る呪操兵に対抗するための実験機である。クリシュナが、武者修行に出る際に祖父のマハート・キメルより贈られたもの。

銀に輝く機体を駆って決闘では無敵を誇り、自らの輝くばかりの銀髪とあいまって、クリシュナは“銀の貴公子”の異名をとることになる。

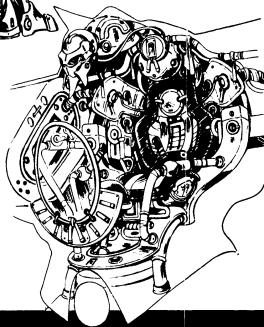


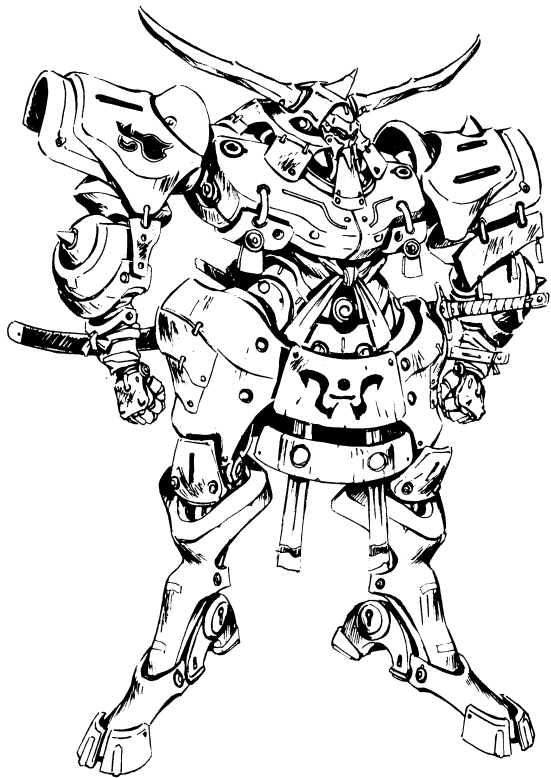
兵 鑑 操 名

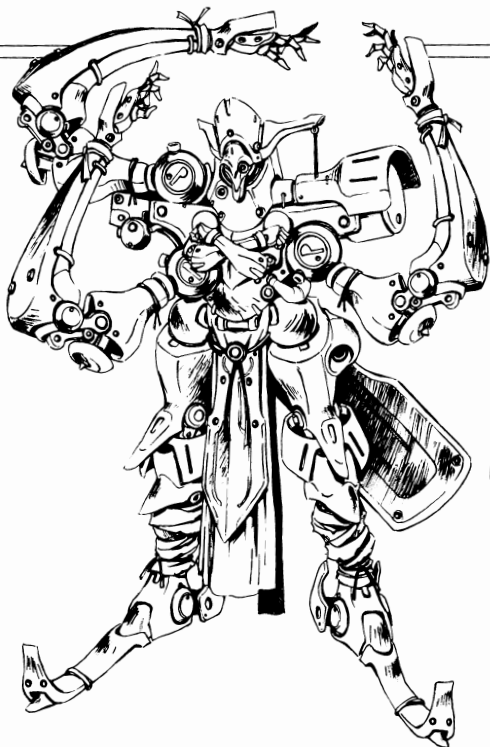


パラシュ・バラハ

聖刻騎士団員ガルン・ストラの乗機。左右に広がる二本角を持ち、機体色は赤銅色である。ストラ家の4代目の当主が法王より賜ったもので、以来ストラ家当主に譲り継がれている。成人し正当な騎士団員となったガルンが、父親より譲り受け使用している。腰に大小2本の刀を具え、ガルンの剣技そのままの居合の術を得意とする。



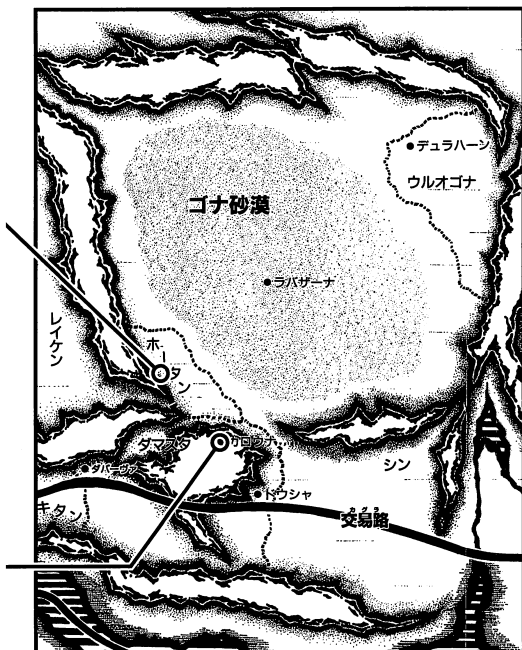




【操兵名鑑⑫】
ゾマの呪操兵

^{フエンレイ}
『風の門』のゾマが操る呪操兵。 本の格闘用の腕を持ち、別に結印
特異な形を持つ呪操兵が多い中で、用の2本の腕を持つ。風術はもと
さらに怪異な形状をしている。3 より、雷撃をも駆使用する。

【聖刻1092の舞台】

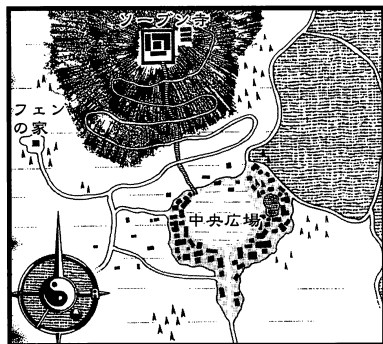


●ダマスタ国

《交易路》が東西に横断するダマスタ国は《中原》の国家群の中でも特に開放的な国家である。王都ダバーヴァの王宮は《西方》の文化を色濃く受け継いでいるが、市街地では《東方》人街も目につく。国境はカルバラ教だが、交易による権益を重視し、西方の《ベカーナ教》や東方の《聖刻教》も容認している。また民間宗教であるラマス教は弾圧の対象とされているが、都に限った話で地方では目の届かないこともあり、事実上野放し状態にある。



●旧ホータン領



●カロウナ村

聖都巻 第一章より

「フェンであったか。おかしなところから降ってくるから盗っ人と思ったぞ」

金の覆いをつけた蠟燭立てを持った老人が立っていた。

「じ、爺っ、何でここにっ!？」

じろりと睨まれ、フェンは態度を改める。

「こ、これはハラハ管長さま。村の宴会にお呼ばれしていたのではございませんか？」

「弟子に祭りの参加を禁じて、わしひとり饗応を受けるわけにはまいらぬであろう。挨拶だけして引き揚げてきたところじゃ」



聖都巻 第一章より

「あんた、その飾りをつけてフェンに逢ってみたら。気づかないようだったら脈はないわ。さっさと見切りをつけて別の男を探したほうがいいわ」

「そうかしら……ね」

自信なげに応えたが、心中は反対であった。(いくらフェンだって、気づいてくれるわ。『よく似合うね』っていつてくれるかも)

「リムリア、その笑い方、気持ち悪いわ……」

「き、気にしないでよ。それじゃ、あだし帰るわ。ご忠告ありがとう」

妄想から覚めるや、リムリアは逃げるように去っていった。

聖都 巻 第一章より

「返して！ それは母さんの形見なのよ！」
リムリアは半分泣き声で叫んだ。しかし、首飾りを細かく調べているガシュガルは、気にも止めていなかった。

「ゼナム！」

間髪入れずに副官が飛んできた。

「すぐに撤退の用意をさせろ」

「すると、やはりその女が」

「目的は果たした。すみやかに離れるぞ」

そして、ガシュガルは高らかに笑い声を上げた。

リムリアは強い不安感に襲われていた。

な、何よ、あの人たちはあたしをさらうためにこの村を襲ったというの！ こんなことってある？



聖都 巻 第一章より

フェンは力任せに操縦桿を押した。剣を止める金具が吹っ飛び、ヴァシュマールが鞘のついたままの剣を両腕で振りかぶりながら、ガリオン・シーカに突進した。周囲の嘲り声が消え、息を呑んだ。

だが、ガシュガルの操兵の左腕から光が発し、次の瞬間には真っ向からヴァシュマールの剣を受け止めていた。

いつ剣を抜いたんだ！

フェンには敵の動きが見えなかった。

ガリオン・シーカの剣は半月剣と呼ばれる種類で、三日月状の幅の広い刀身が特徴である。切れ味そのものはとりたててよくないが、肉厚があり剣の重量で叩き斬るといった、腕力の強い操兵向きの剣である。

聖都巻 第一章より

「ありがとうよ。あんたのことは忘れねえ。また、逢うことがあったら今度こそ酒を酌み交わそうぜ」

「ああ、何年後になるかわからんが、約束しよう」

イルは真っ白な歯を剥き出して笑い、そして、馬の向きを変え、もときた道をまっしぐらに戻っていった。

フェンはイルの姿が見えなくなるまでずっとその方向を見ていた。

「さあ、ヴァシュマールよ。俺の相棒はおまえだけだ。これから仲良くやろうぜ」

フェンは頭上の仮面を仰ぎ見た。



聖都巻 第二章より

口の中で何か呪文のようなものをブツブツと呟いた。

すると天幕内がずっと暗くなり、反対に水晶の中心からほのかな光が湧き出てきた。

ジュレは眉間に縦じわを作り、一心不乱に奇妙な韻の言葉を唱え続けた。

球の光は次第に明滅を始め、同時に家具がゴトゴトと音をたてて震動し始めた。フェンは驚いた顔であたりを見渡した。

娘の顔に脂汗が浮かんできた。占いというものをまったく知らないフェンにも、今起きている現象がまともではないと察した。

「ジュレ、大丈夫か」と声をかけるが、夢中で呪文を唱えている。

聖都巻 第二章より

いったい誰が助けてくれたのか？ フェンはその腕の先を見た。

まずきらめくような銀色の髪が視界に飛び込んできた。そして、その髪の下からは均整のとれた美しい顔が現れた。切れ長の茶色い目、多少つり上がりぎみの眉、すらりとした鼻筋、奥の席にいた剣士だった。

「それくらいで止めませんか。この人の負け分はわたしが肩代わりしますから」

「な、何だ、てめえは？ 引っ込んでいろ！」

シュワイは力任せに振りほどこうとするが、掴まれた手は微動だにしない。華奢な体つきだが、とんでもない筋力の持ち主だった。

「ええ、普通なら見過ごすところですけど……目の前に血まみれ死体が転がっているはせっかくの酒がまずくなるじゃないですか」



聖都巻 第二章より

「きちちゃって……どうしたんだ。こんな夜更に」

「話はあと。荷物重いんだからさ」

ジュレはフェンを押し退けて戸口を潜る。中にいたクリシュナに気づくと、愛想よく笑いかける。

「このお嬢さんは？」

尋ねられても、フェンには説明のしようがなかった。

「女将さんから聞いたけど、下で暴れたそうね。ダメじゃない、喧嘩なんかしちゃ」

ジュレが荷物を隅に置きながらいった。そしてクリシュナのほうを見やって、

「あなたが助けてくれたんですってね。フェンに代わって礼をいわせて。どうせそんな気遣いしないでしょ」

聖都巻 第三章より

いずことも知れぬ場所に作られた小さな殿堂——ここに九人の男たちが集まっていた。

八人は車座になり、その中央に黒い外套に白い仮面をつけた男が座っていた。八人の男たちもそれぞれ仮面をつけていたが、長衣、あるいは外套はみな異なる色をしていた。

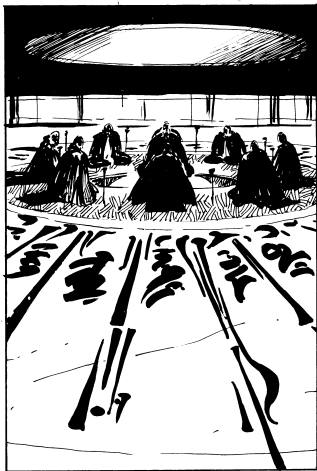
彼らのそばには背の高い燭台がひとつずつ備えられ、蠟燭の火がほのかな光を発していた。殿堂内に緊張感が張り詰めていた。

「大師。《聖華八門》揃いましてございます」

白い長衣の男が静寂を破った。彼はフェンがいた村、カロウナに現れた練法師《風の門》ゾマであった。

「この度の招聘は、計画の修正に関する最後の確認である……ゾマ、頼むぞ」

中央に座した男がピクリとも動かずにいった。大師ダム・ダーラである。



聖都巻 第三章より

その瞬間、呪操兵の左肩の龍の首が突如、口を開き、飛来する四本の短剣に向かって、毒々しい赤色の瘴気を吐いた。短剣はそれに包まれた途端に勢いを失い、ポトリと地面に落ちた。

「《銀の貴公子》よ。きみの意図は最初から読めていたのだ。わたしにはこの可愛い龍たちがついてる。護衛など最初から不要なのだよ」

バルサの嘲笑うような声がクリシュナに届いた。

あれはなんだ？ 練法ではないのか。

クリシュナの眼は、バルサの操兵の両肩で生きもののように蠢く双頭の龍に注がれた。それは時折、鼻から瘴気を吐き、まるで意志を持つかのように首を巡らせていた。

聖都巻 第三章より

「どうやら、ヴァシュマールは、わたしの機体以上の耐熱能力を持っているようです」

「そんなはずはない。《蒼炎龍》は、おまえに放った《紅炎龍》の十倍の熱量を持つのだ。あの炎に耐えられる物質など、この世に存在しない」

火炎に変化が生じた。青白かった炎がゆらめき、黄色、赤色に転じ、そして、急激に膨張を始め、まばゆい光を放って拡散した。その閃光に、谷にいた全員の目がくらんだ。

光の中にヴァシュマールはいた。その外装には、焼け焦げひとつなく、何か超然とした様子で立ち尽くしていた。

「フェンよ。フェンが生きていたのよ」
ジュレの泣き顔は嬉し泣きに変わった。
バルサの呪操兵が数歩後退りした。



聖都巻 第四章より

王都デュラハーンは国内でも比較的北寄りに位置する。人口一万五〇〇〇人。周囲を高い壁で囲んだ城塞都市で、常に三〇〇〇の王直轄軍が駐留している。

都市の政庁区に隣接して東方様式の寺院があった。上空から俯瞰すると八角形の主聖堂が設けられている。これは近年中原でも勢力を浸透させつつある、《東方聖刻教会》特有の作りである。その証拠に、門や支柱など至るところに蓮の花を想起させる八枚の花びらを象った紋章が飾られていた。教会ではこれを《聖華》と呼んでいる。



聖都巻 第四章より

「だったら、ひとつ頼みがあるんだが」
待ちかねていたとばかりに、フェンがガルンと試合をさせてくれと申し出る。
「こいつの鼻っばしらをへし折ってやりてえんだ」
「おもしろい。きさまの減らず口、少々癪に障っていたところだ」
先ほどの睨み合いがまだ収まっていなかったのか？ いや、内心強い敵愾心を抱いていたふたりならば、いずれにしろぶつかり合っていただろう。
「試合ならば認めよう。どちらが勝っても遺恨を残さぬこと。これが最低条件だ」
老人は呆れた顔を見せながらも、ふたりの勝負に興味が湧いたようだ。



聖都巻 第四章より

ガルンとて決してフェンを見くびっていたわけではない。稽古の動きからも並外れた身体能力の持ち主だということは察していた。だが、身のこなし、反射速度、目のよさ、あらゆる点で予測をはるかに上回っていた。
（これで本当にひと月前、瀕死の重傷を負っていたのか！）
ガルンの顔が引き締まったものに変わる。何か心に決めたことがあるようだ。そして、居合いには戻らずに、すっと木刀を高くかかげ、上段の構えに移った。
フェンは肌にひりつくものを感じる。
（ようやく本気になりやがったな。面白え）
今までもガルンは手加減などしていない。ただし全力といってもあくまでも試合としてだ。

聖都巻 第五章より

焚火を挟んでふたりの男がどっかり腰を降ろしていた。フェンとガルンである。ふたりとも疲れ果て、口を開くことすらおっくうのようであった。

焚火のそばに二騎の巨人兵が片膝をつく姿勢で置かれている。激しい戦いの後のように、鎧には痛々しい傷跡がいくつも刻み込まれていた。だが、致命傷となるような大きいものはなかった。

聖刻騎士団の前団将ラドウの死から二日後、フェンとガルンはカッチャナラ山を下りた。だが、下山の途中、謎の操兵部隊の襲撃を受けたのであった。

「なあ、ガルン。囲みを抜けたら、奴らの正体を教えるっていったよな」

フェンが細い枝を焚火に投げ入れながら、話しかけた。



聖都巻 第五章より

「お待ち下さい、公爵夫人。どうかこの場は、穏便に取り計らってはいいただけないでしょうか」

と、クリシュナが前に進み出た。

「あれだけの侮辱を受けてなお、この者を庇うおつもりなのですか」

「ラノウ伯はかつての上官です。きっと、昔の部下を戒める意味で強い口調になったのでしょう。決して騒動を起こす気などなかったと思います。今の抜刀も、わたくしの修業の成果を見たいという親心。もし、ラノウ伯にお咎めがいくというなら、ぜひ、このわたくしも共にお裁き下さい」



聖都巻 第五章より

歩兵、騎馬と続いた後に、群衆の一番のお目当てである操兵部隊がやってきた。

歓声が高まる。

全高約二リート（八メートル）の巨人兵が、行進するさまは何よりも力強いものがある。一〇〇騎の操兵の足音は、観衆の声を上回って余りがあった。

操兵の大半が狩猟機と呼ばれる上級機種であった。背中や腰には、刃渡り二リートはある巨大な剣を下げ、左腕や肩に厚い盾を取り付けている。

その下位機種は従兵機と呼ばれる。全高一リート半といったところで、首がなく、顔代わりの仮面を胸につけている。操手槽の天蓋はなく、乗り手の姿が観衆たちからも見えた。



聖都巻 第五章より

「……ところで、ルアロ、おまえは湯に入らないのかい」

クリシュナの顔に意地悪そうな笑みが浮かんだ。

「はい、残り湯で顔ぐらい洗おうと思っていますが」

「今日一日、馬車で揺られてきたんだ。埃まみれの子を、わたしの寝台に入れるわけにはいかないな」

「それはどうい……」

「忘れたのかい。野営すると冷えるから、おまえと一緒に寝て、暖め合おうって決めたじゃないか」

「うっそー！ そんなこといってなかったわよ」

ルアロの声が女の子の声に変わった。

「やっぱり」

クリシュナはさっと振り返った。



聖都巻 第六章より

フェンは一瞬躊躇したが、度胸を決めて足を踏み出した。

「よくきたわね、あたしがラーパーティよ」

フェンは己の目を疑った。フカフカの敷物の上で、しどけなく寝そべっている娘——これが、盗賊どもの頭だということか！

確かに胸や腰の肉づきは成熟した女のものだ。申し訳程度についた布から、今にもはみ出そうになっている。だが、水蜜桃のようなみずみずしい肌、口もとを覆う薄衣の上で輝く黒曜石のごとき大粒の瞳は、どう見ても一〇代のものだった。

「フフフ、こんなに若い女とは思わなかった？」



聖都巻 第六章より

「うそ……フェンなの」

娘の見開いた眼からボロボロと涙が湧き上がってきた。手は口を押さえ、その肩はか細く震えていた。

娘はフェンに駆け寄って、抱きついた。棍が手を離れ、絨毯の上に転がった。

「おい、おまえリムなのか。本当にリムか」

フェンは胸の中で泣きながら何度もうなずいている娘を抱き締めた。

「よく無事でいたな、おまえ」

フェンの胸はうってかわり、かつてない充足感に満たされた。大きな、そしてごつい手が何度もリムリアの頭をさする。

聖都巻 第六章より

血溜まりが床にできていたが、練法師の姿はどこにも見えない。鉄格子の扉が開いており、血の染みが点々と奥へ続いていた。

「ガルン、傷は」

「へ、平気だ。俺に構うな……」

フェンは棍を拾い、血の跡を追った。牢を出るとすぐに昇り階段があった。

階段を昇りきると聖堂に出た。隠し扉が開いたままになっていたのだ。血は聖堂を抜け、中庭に続く、渡り廊下の先まで続いていた。

フェンは胸の痛みをこらえて、走った。

渡り廊下には朝日が差し込んでいた。そして、中庭をよろよろと進むカルラを見つけた。

「待ちやがれ、カルラ」

フェンの体から、怒号が鳴り響いた。腹の底で煮えくり返っている怒りが生み出したものだ。



聖都巻 第六章より

突然、上から男の声が響いてきた。それと同時に旋風がフェンに襲いかかった。

フェンの体は風に巻き上げられ、中庭の境界である渡り廊下まで吹き飛ばされた。

廊下の柱を叩き折って、さらにその向こうの石壁にぶつかった。

背骨を強く打って、フェンは声も上げられなかった。

「……ソマ……あなたなの。信じられないわ」

その目には歓喜の涙が溢れていた。

中庭の上空に、朝日を浴びて金色の光を放つ呪操兵の姿があった。以前、カロウナに出現した《風の門》ソマの操兵である。三本の格闘戦用の腕が右肩、左腕の付け根、右脇腹から伸び、胸の位置に二本の練法用の腕がついている。極めて特異な形状であった。それは《浮遊》によって空中に静止していた。



聖都巻 第七章より

アビ・ルーパを中心に一〇騎の従兵機が横に広がっていった。たとえ、巨大な体軀を持つ操兵であっても、数千の騎馬の前ではあまりにも小さく見えた。

血気にはやる騎馬の大波が一挙にクリシュナたちを呑み込んだ。

しかし、簡単に埋没するような男たちではなかった。

銀色の狩猟機が両手に持つ細剣を一閃するたびに、ウルオゴナの軍馬から血煙が上がり、焼けた砂地に倒れ込んだ。剣を片手に斬り込む兵がいても、そばに寄る前に巨大な剣で斬り殺されてしまった。

アビ・ルーパは決して立ち止まることはなかった。常に足を動かし、騎馬の体当たりを躲しながら新たな敵を求めていった。



聖都巻 第七章より

ダマスタ兵は誰からともなく、勝鬨を上げた。夜明け前までは全滅するのはこちらのほうだと諦めていたのだ。勝利の喜びはひとしおであった。

全身傷だらけになったアビ・ルーパのまわりに、何千という兵や騎馬、操兵が駆け寄ってきた。

その胸の扉が開きクリシュナが姿を見せると、彼らは歓声を上げた。

「クリシュナさま、万歳！」

「銀の貴公子、万歳！」

この戦いの指揮官であったクリシュナをたたえる声は、勝鬨以上に大きかった。

聖都 第七章より

「風が出てきたか……」

砂漠の真ん中に立つ白い町の城壁の上でひとりの男が呟いた。

男の視線は、南の地平線に向いていた。茶褐色の砂漠の向こう側にぼんやりと山脈が見える。

その鋭い眼光、隙のない身のこなしは、男が武人、それも達人の域に達する者であることを示していた。頭髪から革靴の爪先まですべて黒で統一していたが、伊達男という印象からはほど遠い。その髪と髭は、おそらく邪魔になったら小刀が何かで適当に切っているのだろう、長さも不揃いで、櫛の通ったあとなど見られなかった。そして、上着、鎧、外套、それらすべての衣装は薄汚れて、ところどころに破れや傷があった。



聖都 第七章より

ゾマの仮面の下から押し殺した笑いが漏れてきた。

ここはリムリアが寝ていた部屋の隣にあった居間のような場所だ。中央に厚い絨毯が敷かれ、部屋の隅には暖炉も備えつけられていた。ただし、椅子などの家具はないため、ふたりとも立っている。

リムリアはやはり目の前の男が怖かった。こうやって顔も見られず、笑い声を上げられると、部屋を飛び出したくなる。手の中には、母親の形見である群青色の宝石をちりばめた首飾りがしっかりと握り締められていた。何か勇気が必要な時は、昔からこの首飾りの力を借りてきたのだ。

